

## 佐藤良輔先生を送る

松浦充宏（地球物理学教室）

佐藤良輔先生は、昭和28年に東京大学理学部地球物理学科を卒業された後、大学院研究奨学生を経て、昭和33年に東京大学理学部助手として任官されました。昭和35年に東京大学から理学博士の学位を授与され、昭和41年には理学部助教授に昇任、昭和55年からは理学部教授として地球物理学教室の地震学講座を担当されております。先生は、この間、大学院理学系研究科地球物理学専門課程主任、地殻化学実験施設長、地震学会委員長（現行会長）、地震予知研究協議会議長など多くの要職につかれ、広く日本の地震学の発展のために尽くされました。先生は、又、四半世紀もの長きにわたり、欧文の固体地球物理学専門誌（J P E）

の編集長として、その育成と発展に尽力されておられました。更に、昭和60年に我が国で初めて開催された国際地震学・地球内部物理学協会（I A S P E I）第23回総会では、国内組織委員会事務局長として活躍されました。

私が地球物理学科に進学して初めて佐藤先生の講義を受けたのは、もう20年も前のこととなります。当時の地球物理学科の講義は多少いいかげんなところもあったのですが、先生の講義は、大変分かりやすくきちんとしたものでした。その後先生と親しく接する機会が増えるにつれて分かってきたのですが、先生は、この「きちんとする」ということを、単に講義だけに限らず、何事におい

でも信条とされておられたようです。もっとも、先生は大変お酒がお好きで、よく我々学生連中を飲み連れて行って下さいましたが、そのような時は例外で、何時もきちんとしておられる先生が、堅苦しい信条などはすっかり忘れ陽気な「お父さん」に変身してしまわれるのが常でした。これは、多分、先生の気分転換法の一つだったのでしょうが、我々学生連中は、そんなところにも先生の人間の魅力を感じておりました。

私が大学院に進んで佐藤先生の指導を受けるようになった頃、先生は英国から戻られて間もない気鋭の若手助教授でありましたが、すでに理論地震学の大家としての風格をそなえておられました。当時、地震学研究室には私と同期の修士の学生が4人もおりましたが、先生は、この4人の学生全員を一人で指導されてしまわれたのです。今、自分が学生を指導する立場になってみて、それがどんなに大変なことであったか身にしみてわかります。修士課程の学生に対する先生の指導は、テーマの選び方、問題へのアプローチの仕方、果ては論文の書き方に至るまで、実に懇切丁寧なものでした。博士課程の学生に対する指導は、これと反対で、何時でも相談には乗るが、あくまでも本人の自主性を尊重するというものでした。このような指導方針の違いは、「博士課程は自分で問題を見つけ解決していく一人前の研究者になるための

訓練期間である」との先生のお考えによるものです。

先生の学問的興味の中心は、一貫して、地震波の発生と伝播に関する理論的研究にありました。1960年代には、主に発震機構と地震波の減衰に関する基礎的研究に力を注がれ、1970年代には、「食い違い理論」に基づく実体波や表面波の理論地震記象及び地殻変動などに関する研究を精力的になされました。これらの研究は、いずれも、その後の理論地震学発展の基礎となる重要なものでした。また、1980年代に入ってから、短周期地震波の発生と伝播の研究を通じて地震動災害予測に関連した分野でも活躍されました。先生は、常に一兵卒として研究の最前線に立つことを好まれました。研究に対するこのような基本的姿勢は教授になられてからも変わることなく、今でも、わずかな暇を見つけては御自身で計算プログラムを組み、端末のキーボードを叩いておられます。

先生は、今年の3月をもって東京大学を退官されますが、これからもお好きな地震波動理論の研究を続けていかれることと思います。先生は、助手、助教授、教授の時代を通して、実に多くの弟子達を育ててこられました。その多くの弟子達を代表して、これからの先生の御健康と益々の発展をお祈り申し上げます。